

# 小鹿野町小鹿野小学校出土の鉄銚について

山田 琴子・肥沼隆弘\*

\*小鹿野町教育委員会

## 1 はじめに

小鹿野町小鹿野小学校出土の鉄銚は、昭和45年の小鹿野小学校の新校舎建設工事現場から出土したと伝えられている。その後、西秩父総合センター郷土資料室に保管されていた。その後現在に至るまで、町の広報誌の他、同じ秩父郡内に所在する皆野町による『皆野町誌 通史編』（皆野町誌編集委員会1988）の中で写真が紹介されているものの、その存在はほぼ知られていなかった。

さきたま史跡の博物館では、平成29年度の企画展『埼玉の古墳2 -秩父・児玉・大里-』の中でこの資料を展示するため、平成28年度に資料調査を行った。この際に資料を実見し、遺存状況が非常に良好であることを確認した。鉄銚は埼玉県内でも出土数が少なく、秩父地域の古墳時代史を解明する上でも重要な資料であることから、埼玉県内の貴重な文化財として広く周知されるよう、誌上で資料紹介をさせていただきたい旨を小鹿野町教育委員会に申し入れ、快諾を得ることができた。

なお本文のうち、第2節、第3節を肥沼が執筆し山田が補佐した。それ以外は山田が執筆した。

## 2. 小鹿野町の位置と環境

小鹿野町は埼玉県西部の秩父地域に位置し、その中でも北部に所在する。北側は群馬県多野郡神流町、上野村と接し、南側は秩父市と接している。

地形的には秩父山地と、それを横断する山中地溝帯と秩父盆地から形成される秩父凹地帯の中に位置する。秩父山地は荒川とその支流によって侵食されており、秩父盆地や秩父山地東縁部では河岸段丘が発達している。

小鹿野町の中は荒川の支流である赤平川が西から東に向かって流れており、これによって形成された低位段丘の上に市街地が形成されている。

小鹿野町長留の赤平川右岸の攻撃面に形成された「ようばけ」は高さ約100m、幅約



第1図 小鹿野町の位置

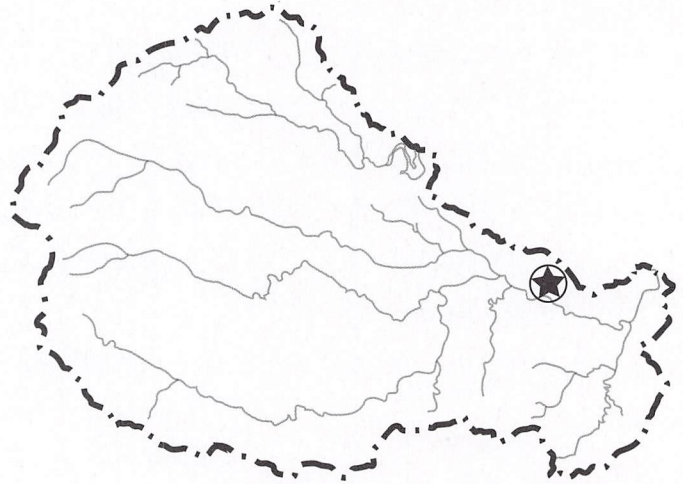
400mに亘る、新第三紀層の露頭である。国の天然記念物に指定されており、また周辺からは古生物の化石が多く発見されていることから、地質学的にも貴重な地域として知られている。

### 3. 周辺の遺跡

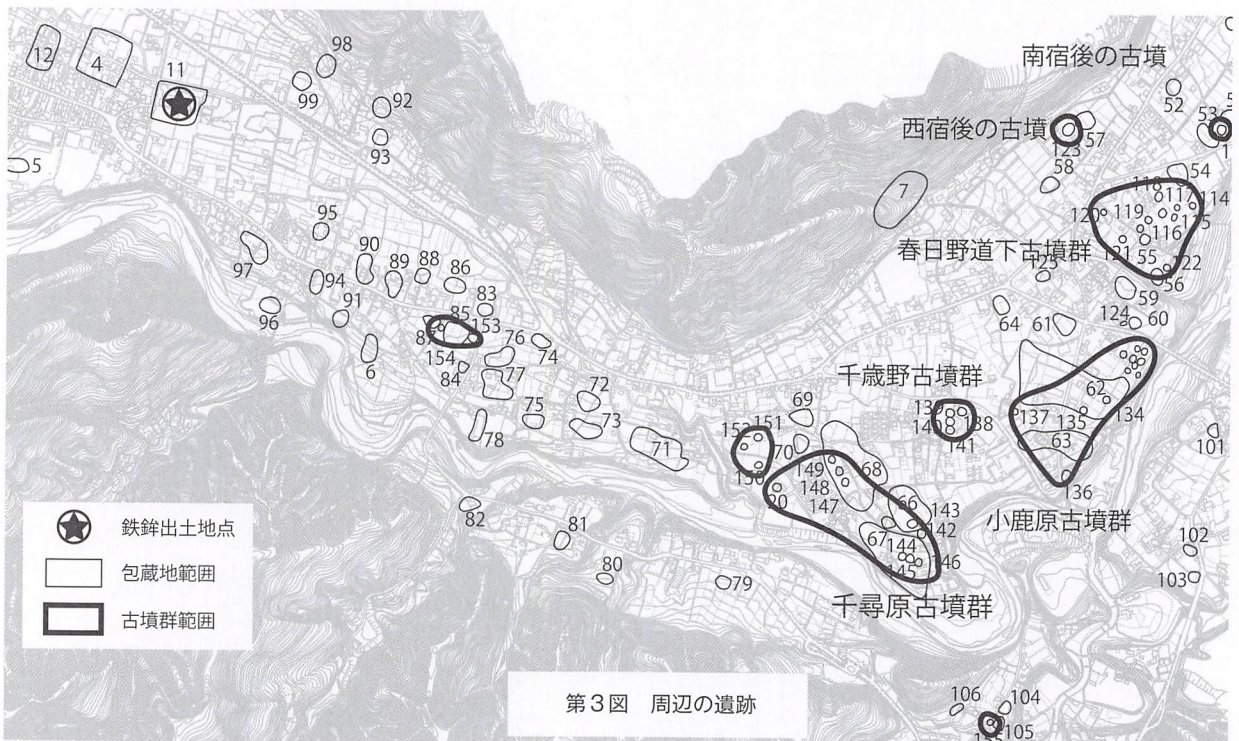
鉄銚が出土した小鹿野小学校は、赤平川左岸の河岸段丘上に所在し、標高250m付近に当たる。同じ段丘上には、川に面して多くの遺跡が確認されている。

古墳時代の遺跡に関しては、発掘調査が行われているものが少なく、詳細が不明である。遺跡分布調査等により、現在までに小鹿野町内では多くの古墳が確認されている。小鹿野小学校周辺の古墳としては、春日野道下古墳群 (No.114～122)、小鹿原古墳群 (No.126～137)、千歳野古墳群 (No.138～141)、千尋原古墳群 (No.8、20、142～149) の他、径30mで西秩父最大の規模を持つとされる丸山塚古墳 (No. 1)、径13mの山の神古墳 (No.111)、径5.4mの南宿後の古墳 (No.113)、規模不明の西宿後の古墳 (No.123) などがある。小鹿原古墳群の中の小鹿塚古墳 (No.137) は「をしか塚」とも記され、現在までに墳丘は改変を受け原型を留めていない。

これらの古墳については、千尋原古墳群中の氷雨塚古墳 (No.8) では石室が開口している事から古墳時代後期と築造時期が確認されている。また、その



第2図 小鹿野小学校の位置



第3図 周辺の遺跡

他3基の古墳が発掘調査されて古墳時代後期に築造されたことが判明しているが、それ以外の古墳については発掘調査が実施されていないため、築造時期や規模についての詳細は不明である。

集落については、縄文時代～古墳時代前期にかけての集落が確認されている北町裏遺跡(No.4)、No.5遺跡の他、小鹿原遺跡(No.62)、南扶桑ヶ原遺跡(No.85)で古墳時代後期の集落が確認されている。集落についても分布調査により散布地として確認されているものが大半であり、発掘調査によって遺跡の詳細が明らかになることが待たれる。

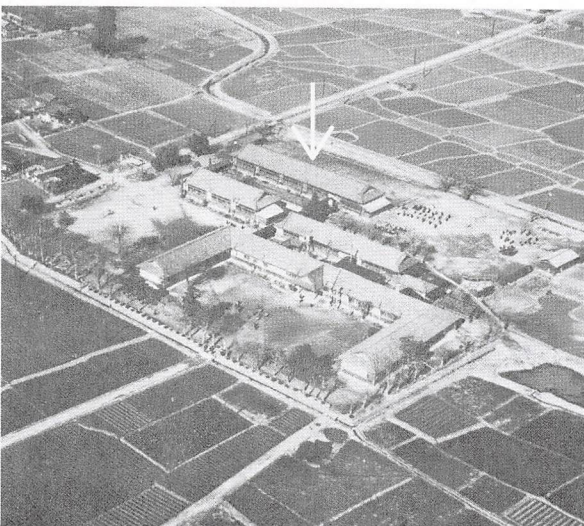
なお、鉄鉾が出土した小鹿野小学校は「小鹿野氏館跡」(No.11)として包蔵地に登録されている遺跡である。鎌倉時代の小鹿野氏の城館址という伝承を基に登録がなされているが、発掘調査は行われておらず、遺構は確認されていない。

## 4. 鉄鉾の出土の経緯

### (1) 出土時の状況

小鹿野小学校は明治37(1904)年4月に現在の学校敷地に移転した。昭和45年(1970)年10月19日、旧第4校舎(第4図)を現在の普通教室棟へと建て替える工事の際に鉄鉾が出土したと伝えられている。工事に関する図面や写真などの記録は残されていないため、詳細は不明である。

唯一残されていた写真(第5図)を確認すると、工事の基礎となる面まで掘削を終了した状況を写したもののようである。鉄鉾に関連する遺構は全く確認できないが、手前に写る男性の肩の辺り、現地表面から約1.5m以上の深さまで掘削されていたことが伺える。また、男性の後方には掘り返された土と共に川原石が多量に積み上げられている。男性の足元から後方に向かい、礫が面的に広がる様子が見られる。これらの河原石や礫が古墳の墳丘や埋葬施設の構築材であったと考えると、当地点には埋没していた古墳が存在し、礫塚、もしくは礫床が埋葬施設として構築されていたのであろうか。鉄鉾はこの古墳への副葬品であった可能性が高い。



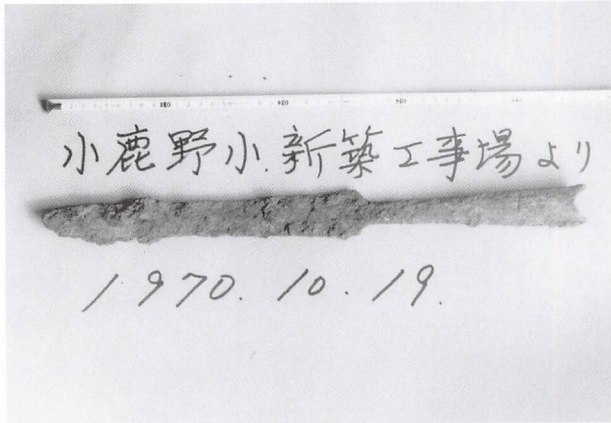
第4図 小鹿野小学校旧校舎航空写真(矢印が旧第4校舎)



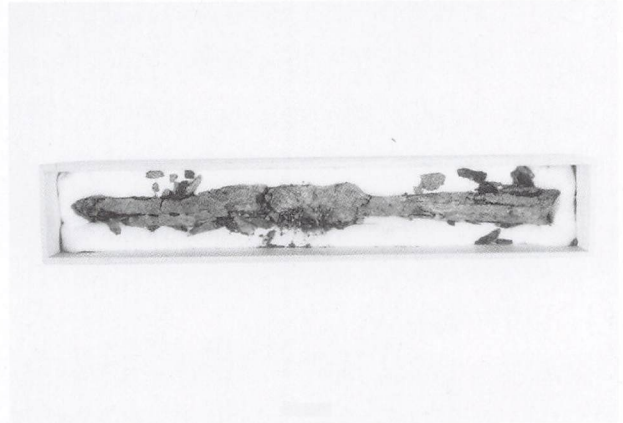
第5図 小鹿野小学校新校舎建設現場

## (2) 出土後の経過

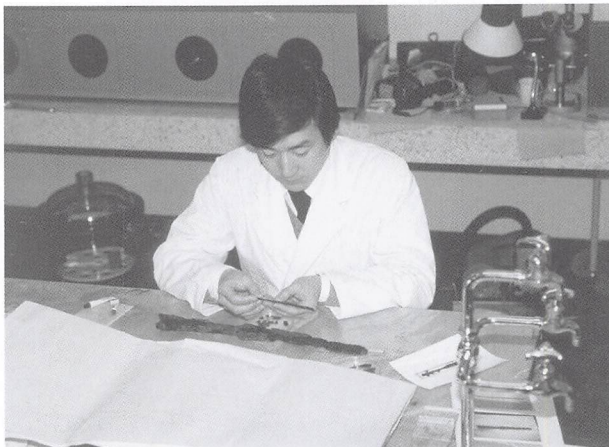
小鹿野町が昭和61年に発行した『広報おがの』の中で掲載された「文化財だより⑩」によれば、鉄鉾は出土した後、西秩父総合センター郷土資料室にて保管されていたが、出土して約15年が経過し、錆が進行し破損がひどく、箱から取り出せない状態となっていた。このため当時の県立歴史資料館に相談し、保存処理を行った。



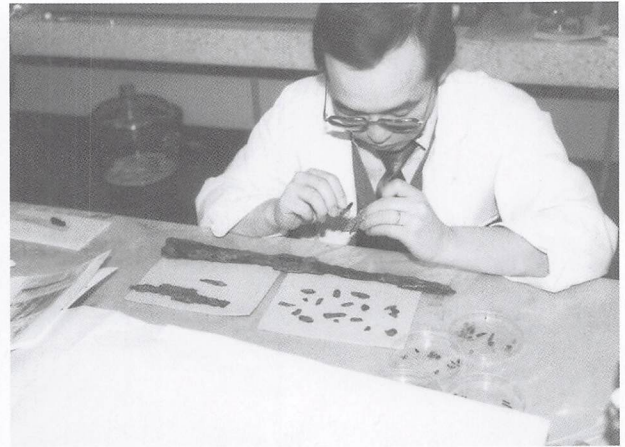
第6図 出土直後の鉄鉾



第7図 保存処理前の鉄鉾



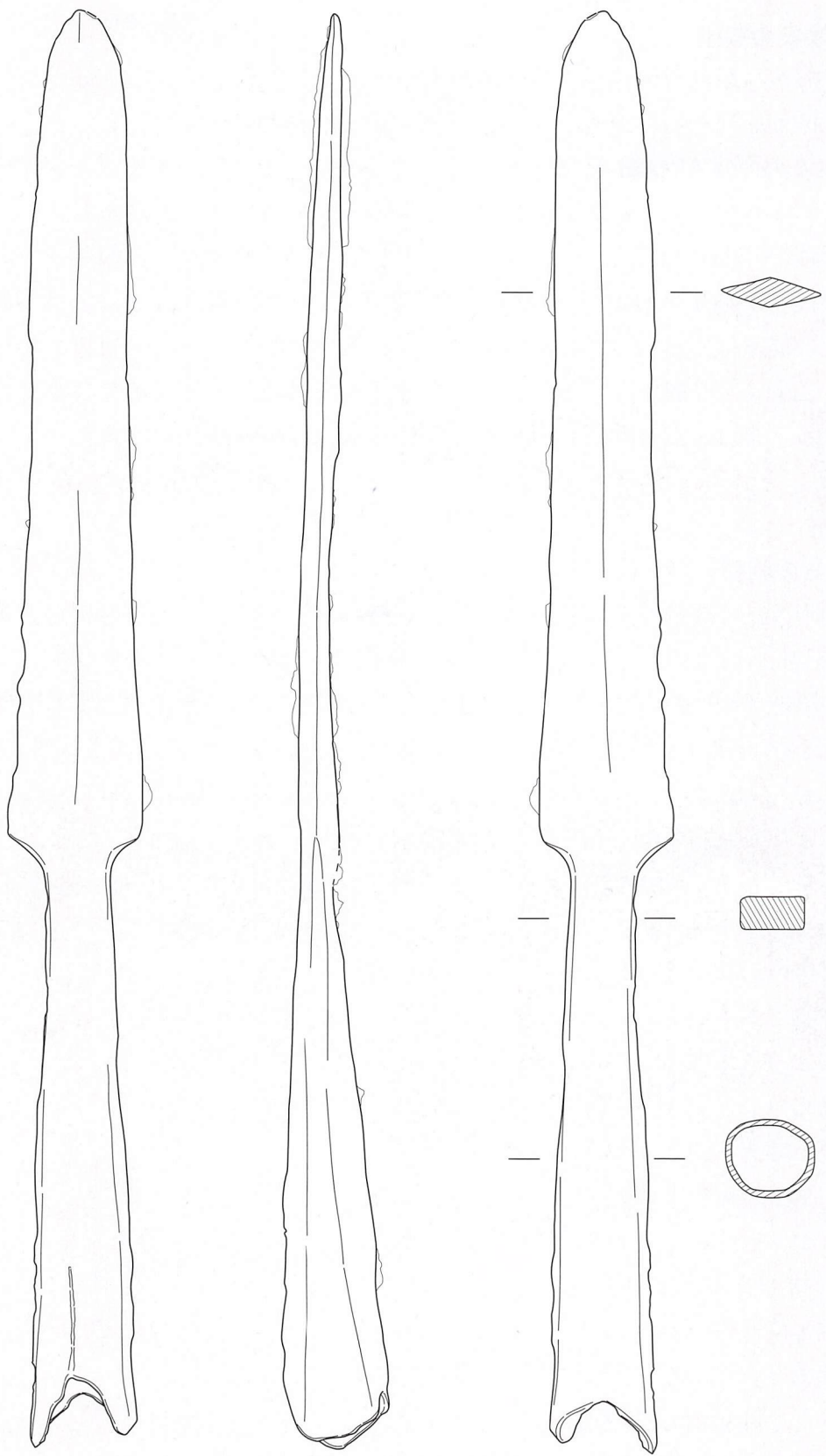
第8図 鉄鉾の修理状況 1



第9図 鉄鉾修理状況 2

保存処理後、アクリルケース内に保存し、現在まで小鹿野町文化センター内にて展示・保管されていた。

なお、この鉄鉾については『皆野町誌 通史編』の中で「小鹿野中学校内から出土した矛と鉄刀」として記載され、写真も掲載されている（皆野町1988）。鉄刀は、昭和26年1月に小鹿原古墳群中の小鹿塚古墳を改修して小鹿野碑を建設する際出土したと伝えられており、同じ町内の古墳ということで混同されたものと考えられる。



第 10 図 鉄鉾

0 5cm

## 5. 鉄銚の詳細

鉄銚の形状、及び規模は以下の通りである。

全長45.2cm、このうち身部26.2cm、袋部長19.0cmである。

身部の最大幅は4.2cm、断面は菱形であり、最大厚は1.0cmである。鎬式の造りであり、身部は袋部より幅広く、菱関を有する。切先の一部をわずかに欠損する。

袋部は錆びのため膨らんでいる箇所があり、判然としないが、円筒袋式であり、端部には深い山型挟りがある。現況では錆のため確認できないが、X線写真によって目釘孔が確認できる。孔の位置は山型挟りの山よりやや上位にある。袋部の合わせ目は、現況では山型挟りの山より3.3cmまで確認できるが、X線写真では袋部の中央付近まで合わせ目が続くことが確認できる。また、袋部の関に近い部分の断面形状は隅丸方形である。

## 7. 考察

### (1) 鉄銚の時期について

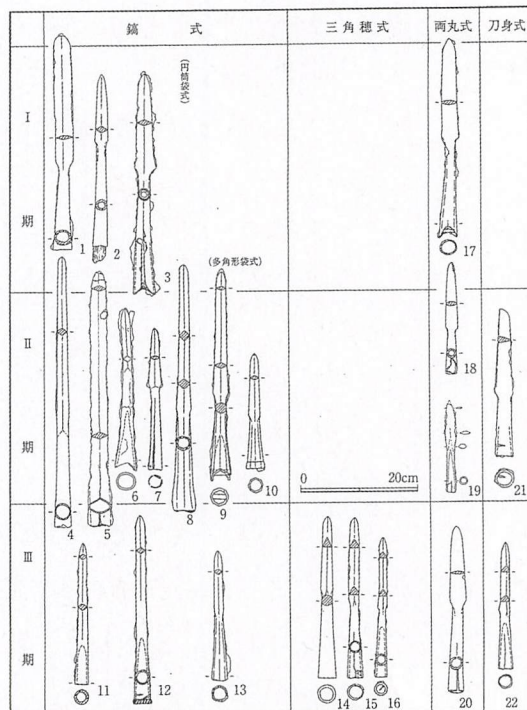
鉄銚の形態的な特徴から、製作された年代を検討してみたい。近年では、高田貫太による編年(高田1998・2014)や菊池芳朗による刀剣類全体を対象とした編年(菊池2010)、富山直人による古墳時代中期を中心とした近畿地方出土の鉄銚の編年(富山2017)などの研究がある。

小鹿野小学校出土鉄銚は、袋部より身部の方が長い、身部の長さは袋部の1.5倍には満たないため「長穂B」となる。また、身部の中心より関に近い位置での、身幅4.2cmに対する厚みは1/2以下となる1.3cmであるため薄手の造りである。袋部端は山形挟を有しており、さらに合わせ目も肉眼で観察できる。袋部の関に近い位置での断面形状は隅丸方形であり、目釘孔は山形挟の頂部よりも上位に位置している。関の形状は菱形に張り出していることから菱関である。

以上のような特徴からは、Ib期のものとして位置づけられ、TK73型式期を中心とした時期のものと考えられることができる。

なお、高田の編年では鉄銚をI～III期に分けているが、その中でも小鹿野小学校出土鉄銚は山形挟りを有している点からIb期以降のものとして位置づけられる。さらに、上述のような特徴を有するものとして、山形挟り導入初期のIb期a類とされる。

こうした出現当初の山形挟り式鉄銚は洛東江下流域と倭との交流の中でもたらされたものであり、北部九州を中心として分布し、中でも渡来人や、渡来人と密接な関わりを持った人物を被葬者とする古墳に副葬さ



1: 倉見4号墳 2: 和泉黄金塚古墳 3: 宮司井出ノ上古墳 4: セスドノ古墳(初穂段階) 5: 御獅子塚古墳 6・20: 高井田山古墳 7: 土師ノ里8号墳 8: 宇治二子山古墳南墳 9: 埼玉稲荷山古墳 10: 大谷古墳 11: 岩田14号墳 12: 物集女塚古墳 13: 伊田孤塚B-4号墳穴 14: 鳥土塚古墳 15: 殿塚山古墳 16: 定東塚古墳 17: 老司古墳 18: 野中古墳 19: 落合3号墳 20: 高崎2号墳 22: 明神山10号墳

第11図 鉄銚の編年(高田2014)

れた状況が指摘されている(高田2014)。

東日本の中でも伊那谷、上毛野や東京湾東岸などの地域には古墳時代中期の朝鮮半島系の資料が多く出土している。高田は、こうした半島系資料は、東日本の地域社会が倭王権との政治経済的関係を基盤としつつ、地域間を結びつけて朝鮮半島へとつながるネットワークの中で入手したものとする。

この小鹿野小学校出土鉄鉾は出土状況が不明であり、埋葬施設や共伴資料についても不明であるため、被葬者像を解明することは困難である。しかし、鉄鉾がこの地にもたらされたのは、秩父地域を含むこの地の首長が、東日本の地域間ネットワークの中で活動した証と言えよう(註1)。

## (2) 秩父地域の古墳について

秩父地域は令制では武蔵国の中の郡の一つである秩父郡域であるが、『国造本紀』には、崇神天皇の時代に八意思金命の十世孫に当たる知知夫彦命を国造として「知知夫国」が設置されたことが記されている。武蔵国の前身である先耶志国が成務天皇の時代に設置されたよりも早く、科野、上毛野と並んで設置されており、秩父地域が早くから開けていたことが窺える。ただし、知知夫国に関する文献は少なく、その領域や性格については明らかになっていないことが多い。ここでは、秩父盆地を中心とした地域を扱うこととし、荒川とその支流の河岸段丘に形成された古墳の様相を見ていきたい。

現在までの所、これまでに秩父地域で確認されている古墳は横穴式石室を有する古墳時代後期から終末期にかけて築造されたものである。また、調査記録が残されていないものや、出土した資料が散逸してしまった古墳も多い。今回報告の小鹿野小学校出土鉄鉾の製作年代とされるTK73期を中心とした時期の古墳は秩父地域では現在のところ確認されていない。ただし、竪穴系横口式石室を埋葬施設として有する皆野町稲穂山古墳や、古墳時代中期以前の土器が確認されている秩父市秩父公園遺跡や金室遺跡など古墳時代中期以前の当該地域の様相をうかがい知ることのできる遺跡も数少ないながら確認されている。

古墳時代後期以降に確認されている秩父地域の古墳からは、鉄製の武器、武具類や馬具が多く確認されている。

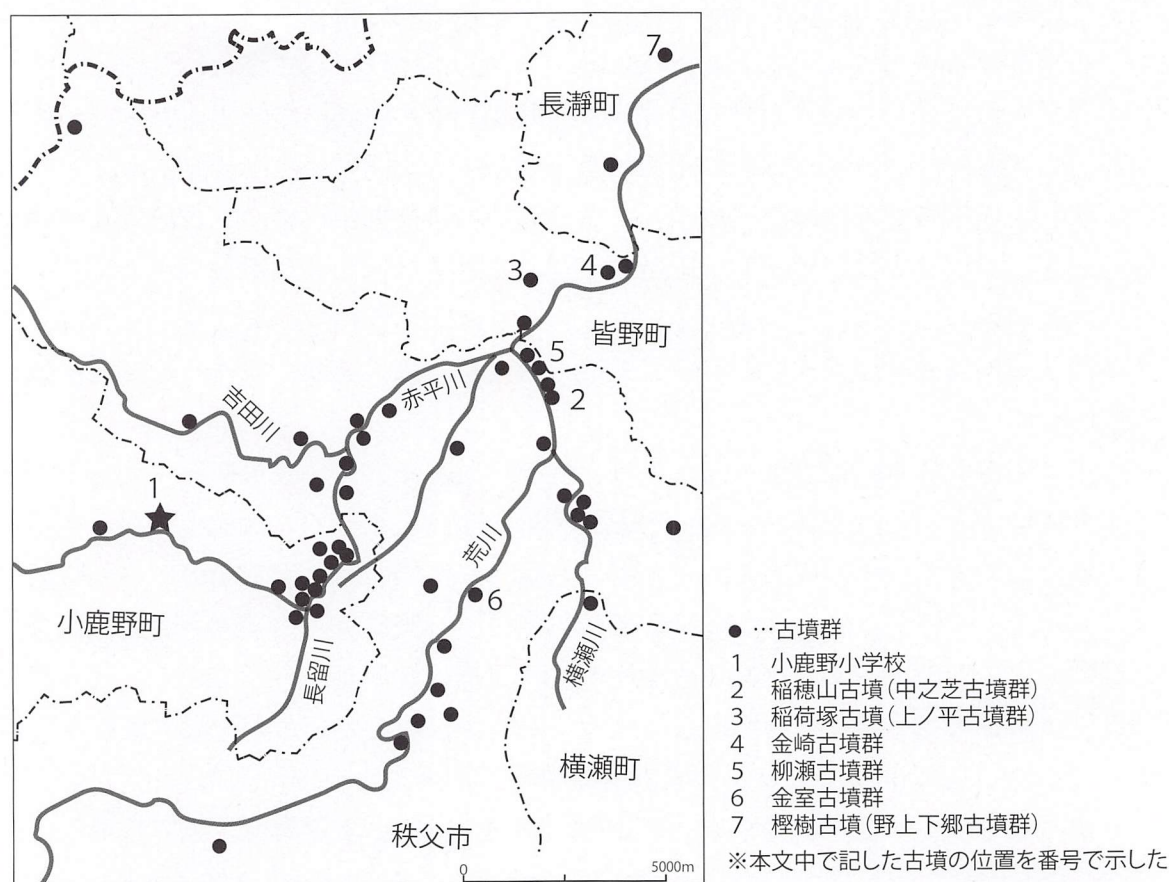
皆野町上ノ平古墳群中の稲荷塚古墳からは、柄頭、鉏、無窓鐔に銀象嵌を有する単鳳環頭大刀が出土している(瀧瀬・野中1996)。また、皆野町金崎古墳群からは大刀5振と倒卵形の鐔4点が出土している。このうち大刀1振に装着されていた鉏と六窓鐔の耳には銀象嵌が施されていることが確認されている(瀧瀬・野中1996)。皆野町柳瀬古墳群中の柳瀬1号墳からは、鉄鏃、大刀の破片、環状鏡板付轡破片の他、胡籥の破片が出土している。この胡籥の破片は鉄板に鋌を打ち込んだものであり、内側に木質が付着しているが、鋌の頭には銀板が被せられている。秩父市大宮所在の金室古墳群中からは堅矧広板鋌留衝角付冑の他、鉄鏃、刀装具等が出土したとの記録が残されている(考古學會1899)。長瀨町野上下郷古墳群中の檜樹古墳からは楕円形鏡板付轡が出土し、TK10からTK43型式期の年代に比定されている(宮代・谷畑1996)。

これらの鉄製品のうち刀剣類については、古墳時代後期後半以降、近畿以外の多くの地域において群集墳内の小規模円墳や横穴からの出土が増加する。こうした状況は、辟邪や威信財としての意味よりむしろ冠位に先立つ緩やかな身分秩序の表象としての性格が強いものであり、また各地域の有力農民層までが組織的に編成される軍事的機構が確立したことを示すものであるとされる(菊池2010)。また、こうした軍事的機構は、後に「国造」とされるような倭政権と緊密な関係を有しつつ、独自の支配領域と武力を保有する有力者の存在によって成立されたものとされる。さらに、後の時代に石田牧が設置されたとする長瀬町周辺に馬具の出土が見られることから、古墳時代にまで遡って馬匹生産が行われていた可能性が考えられる(大谷2008)。秩父地域が知知夫国として武蔵国に先駆けて国造を設置し国として認められた背景には、こうした馬匹生産による政権への関与も指摘できよう。

また、東日本各地で古墳の埋葬主体部である横穴式石室の石材として、秩父地域で産出する緑泥片岩が多く利用されているが、秩父地域の首長がこうした石材の流通にも大きく関与していた可能性は極めて高い。

こうした古墳の様相からは、古墳時代後期に入ってから急激に秩父地域の開発が進んだことを伺わせるが、前述の通り古墳時代中期以前の遺跡も数少ないながら存在していることから、古墳時代中期よりこの地域の開発は始められていたことは確実である(註2)。

小鹿野小学校出土鉄鉾は、朝鮮半島との交流からもたらされた渡来系要素の強い資料であり、この鉾が製作された当時は希少な武器であった。埋納された年代や状況については不明



第12図 秩父地域の古墳の分布



な点が多いが、この地において列島内のみならず朝鮮半島までも視野に入れて活動していた首長の存在について示唆するものであると言えよう。

本稿を執筆するに当たり、小鹿野町教育委員会には遺跡の情報や調査の記録など、様々な資料をご提供頂きました。また、資料のX線写真の撮影にあたっては、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の瀧瀬芳之氏、さきたま史跡の博物館の野中仁氏に大変お世話になりました。末筆に記して御礼申し上げます。

#### 《註》

- 註(1) 秩父地域の古墳時代の遺跡から出土する土器の様相から、南武蔵、諏訪、甲斐との交流が考えられるとされている(田中2003)。
- 註(2) 田中広明は小鹿野小学校出土鉄銚の時期を五世紀前半に位置付けられるとして、この周辺に当該期の古墳の存在を考えている。また、その後の赤平川流域における集落の分布がこの上流域まで広がらないことを指適している。

#### 《参考文献・図版出典》

- 大谷 徹 2008 「知知夫国と古代遺跡」『和銅奉獻1300年記念 和銅フォーラム』
- 菊池芳朗 2010 『古墳時代史の展開と東北社会』 大阪大学出版会
- 考古學會 1899 「◎武蔵國大宮郷の發見品」『考古學會雜誌』第三篇第二號 考古學會
- 齊藤大輔 2014 「古代東アジアにおける裝飾鉄銚の系譜」『第11回古代武器研究会 発表資料集』 古代武器研究会・山口大学考古学研究室
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳 比企・秩父』 さきたま出版会
- 高田貫太 1998 「古墳副葬鉄銚の性格」『考古学研究』第45巻1号 考古学研究会
- 高田貫太 2014 『古墳時代の日朝関係』 吉川弘文館
- 瀧瀬芳之・野中 仁 1996 「埼玉県内出土象嵌遺物の研究」『研究紀要』第12号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明 2003 『地方の豪族と古代の官人 -考古学が解く古代社会の権力構造-』 柏書房
- 富山直人 2017 「近畿地方出土鉄銚の基礎的研究-古墳時代中期を中心として-」『考古学研究』第64巻1号 考古学研究会
- 皆野町誌編集委員会 1988 『皆野町誌 通史編』 皆野町
- 宮代栄一・谷畑美帆 1996 「続・埼玉県内出土の馬具-副葬品としての馬具分析の問題点」『埼玉考古』第32号 埼玉考古学会

#### 《図版出典》

- 第1図 山田作成
- 第2図 山田作成
- 第3図 山田作成
- 第4図 小鹿野町提供 山田一部改変
- 第5図 小鹿野町提供
- 第6図 小鹿野町提供
- 第7図 小鹿野町提供
- 第8図 小鹿野町提供
- 第9図 小鹿野町提供
- 第10図 山田作成
- 第11図 高田2014より引用
- 第12図 塩野2004を元に山田作成
- 写真1 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団にて撮影

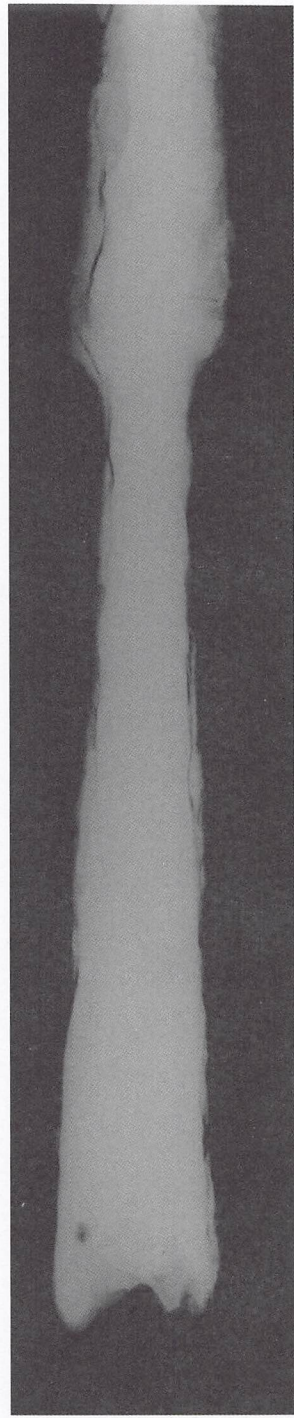
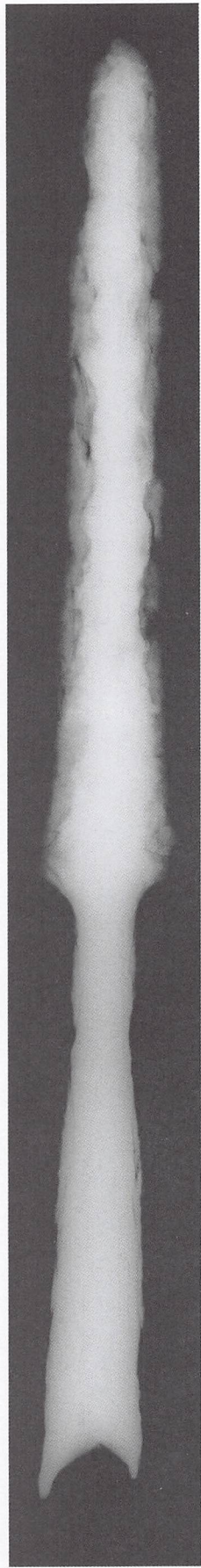


写真1 小鹿野小学校出土鉄鉾のX線写真